

## 福井県の動物群（哺乳・鳥・昆虫類を除く）について

伊 藤 十 治 \*

本稿は、データーバンク環境調査のための基礎資料の一部である。したがって、爬虫類・両生類については、近日中に報告されるのでそれを参照されたい。

### 爬 虫 類

今までに確認されている爬虫類は、へび・とかげ・かめの仲間で 9 科 18 種がある。これらは、すべて福井市立郷土自然科学博物館に保管されている。その 18 種類をあげてみると、次の通りである。和名の後に ( ) 内に示してあるのは、主な生息地である。

日本内地にみられる唯一の毒蛇である *Agkistrodon halys* (Pallas 1776) マムシ（県内各地にみられる一方、他県に比べて多くみられるという）；ウミヘビ亜科 *Hydrophiinae* のうちで最も広い分布をもつ *Pelamis platurus* (Linné 1766) セグロウミヘビ（越前町沖）；日本内地で最も普通のヘビで毒液が眼にはいると失明するともいわれ、分類学上話題になる *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie 1826) ヤマカガシ（県内各地）；日本個有種で、個体数が余り多くないうえに夜行性でもあるので発見しにくい *Dinnodon orientalis* (Hilgendorf 1880) シロマダラ（県内各地）；一見ヤマカガシに似ているが体の小さい *Natrix vibakari* (Boie 1826) ヒバカリ（奥越地方）；日本内地産のヘビ類で最も大きくなり性質はおとなしいが、一種の悪臭をだす *Elaphe climacophora* (Boie 1826) アオダイショウ（県内各地）；日本個有種で比較的陰性のヘビである *Elaphe conspicillata* (Boie 1826) ジムグリ（奥越地方）；山地性のヘビかと思ったら海岸附近で発見された *Elaphe japonica* M. Maki 1931 アカジムグリ（田島海岸附近）；日本固有種で性質は比較的荒いが、よく人に慣れるという *Elaphe quadrivirgata* (Boie 1826) シマヘビ（県内各地）；シマヘビの黒化型であるという *E. q. f. atra* (Jan 1867) カラスヘビ（奥越地方）；日本固有種で、低い草むらなどを好むか、半地上性の生活をする *Takydromus tachydromoides* (Schlegel 1838) カナヘビ（奥越地方）；日本固有種で、日本全土の平地全域に普通みられる *Eumeces latiscutatus* (Hallowell 1860) トカゲ（奥越地方）；四肢の指は吸盤状のうろこで、人家に多く、夜間照明の周囲に集ってくる *Gekko japonicus* (Dumeril et Bibron 1836) ヤモリ（福井地方）；完全な淡水性で、外国ではやわらかい甲をもったウミガメという *Trionyx sinensis japonicus* Temminck et Schlegel 1835 スッポン（県内各地）；日本固有の淡水産種で、小さな本種を夜店などで“ゼニガメ”と呼ばれ、売買される *Clemmys japonica* (Temminck et Schlegel 1835) イシガメ（奥越地方）；愛玩動物として知られる反面、腋下腺などから一種の悪臭を出す *Geoclemys* (*Chinemys*) *reevesii* (Gray 1831) クサガメ（福井地方）；日本近海で最も普通な turtle で、日本内地で繁殖する唯一の *Caretta caretta gags* Deraniyagala 1933 アカウミガメ（たか果

---

\* 福井市明新小学校

沖) ; 熱帯や亜熱帯地方に広く、世界的な分布をし、べっこう細工の原料となる *Eretmochelys imbricatasquamata* Agassiz 1857 タイマイ(越前町沖) ; 海産カメのうち最大で、日本海岸では産卵しないと言われる *Dermodochelys coriacea schlegelii* (Garman 1884) オサガメ(越前町沖) ; 脂肪が緑色なので和名がつき、スープでは美味と言われる *Chelonia mydas japonica* (Thunberg 1787) アオウミガメ(越前町沖) ; 以上の4種類は夏季に本県沿岸へ、しばしば回遊してくる。

なお、トカゲ亜目 *Lacertilia* らしい化石 テトリリュウ *Tedrosaurus asuwaensis* SHIKAMA (美山町上新橋で 北川峻一教諭等が発見)、これはジュラ紀のトカゲ類化石として世界最古のものの1つとして注目されている。

## 両 生 類

かえる・いもりの仲間で、8科16種類が生息していることが確認されている。これらのうちで、アマガエル科 *Hylidae* の5種 ; アオガエル科 *Rhacophoridae* の3種 ; サンショウウオ科 *Hynobiidae* の4種がめだっている。標本はすべて福井市立郷土自然科学博物館にある。

山間地帯(標高1100mの夜叉ヶ池などを含む)に比較的広い範囲で樹上生活をし、卵を泡のかたまりに包み、植物の葉などに産みつける日本固有種の *Rhacophorus arborens* (Y. Okada et Kawano 1924) モリアオガエル(丹生郡の山地・日野川の上流) ; 川の上流でしかも清流に広く生息し、昔から歌や詩に読まれ、日本固有種である。アフリカ大陸だけは分布していないと言われる *Rhacophorus buergeri* (Schlegel 1838) カジカガエル(今庄町広野・岩谷、永平寺町、南川上流域など) ; グリーンランドやオセニア州を除く世界各国に分布し、有名な民間薬(センソ)がとれるという *Bufo bufo japonicus* Schlegel 1838 ヒキガエル(県内各地) ; 北海道以南に広く分布し、繁殖期以外は低い木・草の上で生活する *Hyla arborea japonica* Günther 1858 アマガエル(県内各地) ; 日本では最も普通なカエルであるが、基本型と地方型である高田型(tb型)とが混在しているという *Rana Rana nigromaculata* Hallowell 1860 トノサマガエル(県内各地) ; 帰化動物(1918年米国ルイジアナ州より渡瀬博士が輸入する)の一種で、オタマジャクシのままで越冬するものもあるという *Rana (Rana) catesbeiana* Shaw 1820 ウシガエル 本種の命名者は M. CATESBY (イギリスの博物学者)が、1712~1719年に米国各地で採集し、このカエルを初めて記載したと動物分類名辞典813頁にあるが、筆者はその真偽は不明である。(県内各地) ; 繁殖期や産卵習性が特異で、幼生時代が短く変態直後は極めて小さい、そして日本固有種の *Rana (Rana) tagoi* Y. Okada 1928 タゴガエル(福井市) ; 薬用・食用になるという *Rana (Rana) japonica* Günther 1858 ニホンアカガエル(奥越地方) ; 主として平地や低い山地に最も普通に生息し、変態期間が長い *Rana (Rana) rugosa* Schlegel 1838 ツチガエル(県内各地) ; 主として山地に普通みられる *Rana (Rana) ornativentris* Werner 1904 ヤマアカガエル(県内各地) ; モリアオガエルに同居するのも希でなく、樹上生活より草上生活が多く、水田のあぜなどに産卵する *Rhacophorus schlegelii* (Günther 1858) シュレーゲルアオガエル(県内各地) ; 非常に貧食で肉食なるも繁殖時には雑食性になって体形(尾の長さなど)・体色も多少変化する日本固有種の *Triturus (Cynops) pyrrhogaster* (Boie 1826) イモリ(県内各地) ; 福井・岐阜両県境の山地が南限と言われ、生息場所によって産卵期間に著しい幅がある。サンショウウオ科 *Hynobiidae* では大型の仲間にはいる

*Hynobius* (*Hynobius*) *nigrescens* Stejneger 1908 クロサンショウウオ(奥越一標高1450mの法恩寺山頂など) ; 種小名については問題点があるが, 2~3月頃谷川に集まり石の下に産卵する *Hynobius* (*Hynobius*) *haevius* Kimurae Dunn. 1923 ヒダサンショウウオ(真名川上流) ; 谷川に広く生息する *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn) 1782 ハコネサンショウウオ(県内各地) ; *Megalobatrachus japonicus* (Temminck 1837) オオサンショウウオが県内で捕獲されているが, 果して県内で生息していたものか疑問である。

## 魚 類

県内の淡水魚類については, 加藤賢三(1906), 五十嵐清・加藤文男(1966)などの報告がある。これらの報告をまとめてみると, 8目24科62種になる。詳細についてはこれらの報告を参照されたい。本稿では, 海産魚類について述べたい。ここで述べる海産魚類は, 福井市立郷土自然科学博物館に保管されている標本を基盤にして, 筆者(1973)の報告物を出発的にして現在までに知られるものを追加してまとめたものである。3綱19目38亜目89科140種になる。これらのうち, 次の40種が注目されるであろう。

熱帯魚のキンカガミ(河野村沖) ; 暖海に多いといわれるタチウオ・ツバメウオ(三国沖), イシガキフグ(鷹巣沖), ソウシハギ・ハリセンボン(越前町沖) ; 南日本に分布しているスミクイウオ・アラ・オオメハタ・ヨコスジフエダイ・ヒゲソリダイ・ウバゴチ・シマウシノシタなど(三国沖)・アカアマダイ・チカメキントキ・サクラダイなど(鷹巣沖), コバンザメ(越前町沖), キヌバリ(久々子沖) ; 島根県以南に分布しているというオハグロベラ(越前町沖), ゲンロクダイ(小浜沖) ; 天の橋立附近に生息しているかなり珍しいホシフグ(三国沖) ; 兵庫県津居山沖と舞鶴沖とから知られるテラオゲンゲ(鷹巣沖) ; 石川県西北沖から佐渡ヶ島附近に分布しているメダマギンボ(小浜沖) ; 富山湾などに分布しているシオイタチウオ(三国沖), トミカジカ(鷹巣沖), アゴゲンゲなど(越前町沖) ; 富山湾以北に分布しているクマガイウオ(鷹巣沖), サラビニン(越前町沖) ; 寒海性魚といわれるハナイトギンボ(越前町沖) ; 日本特産で本州中部の太平洋側にだけ分布するらしいといわれるアカメフグ(三国沖) ; 日本沿岸ではむしろ稀といわれるイバラタツ(敦賀沖) ; 太平洋沿岸のみしか記録(新日本動物図鑑—北隆館—)がないキヌカジカ(県内各地), イソカサゴ(三国沖), チゴダラ, アカグツ(鷹巣沖), ムグラヒゲ(越前町沖)がある。深海魚として数種知られている。

## 原 索 動 物

厚い皮の袋をかぶっていて, 海水のでる2つの口をもち, 比較的高等な動物(ホヤ類)である。この類には, 9科15種が今まで確認されている。そのいくつかをあげると次のようである。各地沿岸に最も普通の群体ボヤであるアカイタボヤ・キクイタボヤ・マンジュウボヤ(越前町沿岸), 茎のようなもので各個体が連なり群体をつくるマメボヤ(美浜町沿岸), 若狭湾附近が我が国での分布上, 南限といわれ亜冷水域に生息するイガボヤ, またイガボヤの変種といわれるリッテルボヤ(敦賀湾沿岸), 食用ボヤとして最も有名な単生ボヤのマボヤ(敦賀湾沿岸), 温暖水域の干潮線の岩礁に固着生活をするカラスボヤ(県内各地沿岸), 無色透明な寒天質状の管形をし, 飼育可能で実験の好材料になるユウレイボヤ(県内各地沿岸), 汚損動物の1つで, かなりの汚水にも強い内湾

性のシロボヤ（越前町沿岸）、カキなどの養殖に有害なエボヤ（敦賀湾沿岸）、ホヤ類とは思えない貝殻をつけている単生ボヤのクマサカボヤ（河野村沖） フジツボなどをつけている大形のハルトボヤ（越前町沖）、暖海性で浮遊生活をし、発光動物の1つであるヒカリボヤ（越前町沖）、岩石の下や貝殻の表面などに横たわっているマクラボヤ（三国町沿岸）などがある。

### 棘皮動物

筆者等（1966）によるとなまこの仲間で3科3種；ういの仲間で9科13種；くもひとでの仲間で3科4種；ひとでの仲間で8科14種；うみゆりの仲間で1種1種がみられる。特記すべきものにバフンウニの卵巣を商品にした有名な“越前ウニ”がある。越前ウニについては、大島広（1962）：ナマコとウニ（老鶴園新書発行 160頁）にくわしく解説があるので参照されたい。

他に敦賀湾の水島沿岸でみられる次の種類がある。生時は赤褐色であるが、傷がつくと緑色になるスカシカシパン、前種よりも内湾性でやや泥のまじった砂地に生息するヨツアナカシパン、英語では海のビスケットまたは、cake-urchins とか砂上の1ドル銀貨 sand-dollars といわれるタコノマクラなどがある。変った名で、貝の仲間かと思ったら実はひとでの仲間であるモミジガイ（菅浜沖）などがある。

岩沢久彰博士（1966）によると、ヒメウニ、ハリサンショウウニ、マンジュウウニ、ヘコミブソブクなど本県沖でみられると孫引きにて報告している（日本海の沿岸動物相—東書 高校通信 No.49 p.6—8）が、筆者はそれらの種を確認していないのではっきりわからない。

### 軟体動物

本県産の貝類については、窪田彦左エ門（1962）等によって、福井市立郷土博物館所蔵貝類標本目録にくわしく記録されているので参照されたい。これによると海産の貝が1100余種、淡水産の貝が30余種、陸産の貝が70余種みられるという。

潮間帯附近の貝類は、本州中部地方の沿岸に生息する普通種がわずかしみられない。しかも、本県沿岸産の貝類には北方種と南方種とがいたりまじっている。例えば、波部忠重博士の調査では同緯度の駿河湾産の貝類とを比較すると次のようである。本県沿岸でタカラガイ科が8種に対し、駿河湾産では61種であり：また、イモガイ科1種に対し7種となっている。貝類の分布ははなはだせまいし、水深200mでもエゾボラモドキ、エッチュウバイ、ヒダリマキイグチの如き寒流系の貝類が採集されている。特に、寒海型のアキタガイ（ホタテガイ）が昭和8年に敦賀湾で採集されていることは注目される。その他、同型で化石種として記録されていたオキナチシマガイが越前町沖で昭和38年に生きた貝として採種されている。また、同沖で寒流系できわめて珍しいアブラキヌタレガイが昭和28年頃採集されている。そして、海綿と共生し深海性のカクレニナが越前沖で採集され、新属新種として注目されている。

一方、陸産の貝類で代表的な普通のマイマイはツルガマイマイである。奥越地方ではマイマイ科が8種が確認されている。この中には、最大で最も美しいといわれるクロイワマイマイがある。また、奥越地方にはハクサンマイマイ、ココロマイマイ、トノサマガセルなどの白山系のマイマイ科がみられる。しかしクロイワマイマイは越前海岸山脈でもみられるという。キセルガイ科は13種採集され、そのうちナミゲセルは県下各地に分布している。キセルガイは左巻が普通であるのに反し

て、右巻のオクガタキセルが奥越地方でみられる。エチゼンイツマテガイは越前海岸一帯の頻海性のもので敦賀海岸まで産するが、若狭海岸ではみつかっていない。ニクイロシブキツボは丸岡町長畝・竹田両地区に産し、崖地の流水附近の飛沫がかかる雑草の葉のうら側に生息している。フクイイツマテガイは武生市に産し、前種と同様にまれな種類である。寒地性のパツラマイマイは奥越高山だけに産し、おそらくこの種の南限になるのではなかろうかといわれる。チリメンニッポンマイマイは、大飯郡佐分利地区産を模式産地にしたと黒田徳米博士が報告している。なお、この種は嶺北地方ではみられない。

シジミ科の類別は困難であるが、大別して県産には2系統が分布しているといわれる。カラスガイは嶺南地方でみられるが、嶺北地方ではみられないといわれる。

潮間帯の岩礁地に附着生活をするヒザラガイの仲間は、次の11種類が確認されている。体高が低く、塩分のうすい所では生息しにくいウスヒザラガイ(県内各地の沿岸)、砂れき底に生息する美しいクサズリガイ(越前町沿岸)、殻板は小さくてその両側に剛毛の束があるケハダヒザラガイ(小浜市田島沿岸)、前種より小形で普通にみられるヒメケハダヒザラガイ(早瀬沿岸)、前種よりも大形であるが、個体数が少ないコケハダヒザラガイ(鷹巣沿岸)、岩の小さな穴とかくぼみに生息する最も普通のヒザラガイ(ジイガセ)(県内各地の沿岸)、肉身は食用にできるがきわめてかたい。附着しているのをはがすと腹面にむかって湾曲するババガセ(越前町沿岸)、殻板には成長線に沿ったもくめ状の色帯がはっきりしたアオスジヒザラガイ(美浜町坂尻沿岸)、殻板と肉帯とに色彩の変化があるニシキヒザラガイ(鷹巣沿岸)、干潮線附近の石の下などに普通生息しているヤスリヒザラガイ(県内各地の沿岸)、潮間帯で比較的海水が汚濁している所で肉帯に附着物を多くつけているので発見しにくいヒゲヒザラガイ(三国町・鷹巣沿岸)がある。

後鰓類は淡水産バイカルウミウシを除くほかはすべて海産で岩礁地帯に多く、砂泥底や内湾の藻場などにも生息している。県内沿岸で確認されているのは25科83種である。これらの中で北陸・山陰沿岸と比較して、本県沿岸のみにみられる種類に次の7種がある。ウミウシの仲間ではやや硬く(骨片が多いため)、肛門が鰓の中心からはずれて左側にあるダイダイウミウシ(鷹巣沿岸)、背面に数多くある鰓がミノ状突起になっていて、ほかからの刺激でとれやすいアカエラミノウミウシ(セイロンミノウミウシ)(三国町沿岸)、背面には白色の大きなイボ状突起があって暖流水域にすむイボウミウシ(美浜町沿岸)、内湾の泥砂底に多くたると型をしているカイコキセワタ(ガイ)(敦賀湾沿岸)、体色は紫黒色で背面には大小さまざまな黄色へ橙黄色の斑点を有するミョウジンツバメガイ *Chelidonura tsurugensis* Baba & Abe(敦賀湾沿岸)、体色は黄褐色で数多くの濃い褐色の細かい点がちらばっており、外形はだ円形をしており、鰓は6葉からできているキイロハケジタウミウシ *Geitodoris lutea* Baba(敦賀湾沿岸)、触角の中間に2個の球状ふくらみをもつチゴミノウミウシ(敦賀湾沿岸)がある。なお、後鰓類を観察するには越前海岸和布一帯、敦賀湾とくに水島周辺は浅瀬、砂浜、岩礁に海藻が繁茂していて好適な場所である。

八腕類ではミズダコ(水章魚)については、本県沿岸が南限とか、ムラサキダコ(俗名 ユウレイダコ)については、本県沿岸が北限になるのではないかという説もあるが、筆者は確認していない。

## カニ類その他の甲殻類

本県産のカニ類については、筆者(1958, 1966など)によると現在までに17科90種を確認している。これらはすべて日本甲殻学会会長である酒井恒博士の直接ご指導と同定によるものである。昭和38年に新属新種として記載されたヒメツバサコブシが、昭和42年7月三国町安島海岸で採集された。このカニは太平洋側(相模湾など)にて始めて採集され、日本海側でも採集されたので、当時は新聞紙上で話題になった。90種の中でいくつかのカニを記しておこう。海綿動物や原索動物を背おっているカイカムリ(越前町沿岸)、伝説のカニであるキメンガニ、サメハダヘイケガニ(高浜町沖)、極東特産のヤワラガニ(鷹巣沿岸)、擬態をするコノハガニ(鷹巣沿岸)、擬装で有名なワタクズダマシ(越前町沿岸)およびカイメンガニ(敦賀湾沿岸)、越前ガニで有名なズワイガニとその代用品?とでもいわれるベニズワイガニ(大和堆など)、食用ガニとして最も普通のガザミ(越前町沖)、およびタイワンガザミ(美浜町早瀬沖)、北洋性の食用ガニであるケガニ(越前町沖)、汎インド・太平洋種といわれるイボイワオオギガニ(鷹巣沿岸)、メルギー群島が原産地で、ウミトラノオの根に生息するトラノオガニ(三国町沿岸)、淡水産のサワガニ(県内各地)、カキやムラサキガイの体内に寄生しているオオシロピンノ(小浜市田島沿岸)、発音するスナガニ(敦賀湾沿岸)、岩礁に最も普通のイワガニ(県内各地の沿岸)、石の堆積した磯浜特有のヒメアカイソガニ(三国町沿岸)、河川や内湾に生息するモクズガニ(美浜町久々子沿岸)、全日本の沿岸に最も普通のヒライソガニ(県内各地の沿岸)、海岸に近い沼・溝・田などにいるアカテガニ、ベンケイガニ(鷹巣沿岸)などがある。

その他、県内各地の沿岸でみられる甲殻類を話題になりそうな種類をひろってみると次のようなものがある。発光動物で赤潮の原因になるといわれる日本特産のウミホタル、外国人(AICHARDSON)によって記載(1906)されたが、不明な点が多く話題になったオオツクヘラムシ、変った和名のカメノテ、ウミグモ類、ウミナナフシ、ウミズムシなど、貝類かと思えば甲殻類のエボシガイ、古今和歌集などの古書にでてくるワレカラ類、フジツボ類など多数・多様な種類がある。

安田徹(1970)によれば、ヨーロッパフジツボ、アメリカフジツボ、アカシマフジツボの外来種が県内の沿岸でみられるという。

## 環形動物

海産の環形動物では14科22種を確認し、多毛類が最も種類数が多い。例えば、釣のえさとして有名なゴカイ(三国町沿岸)、サザエの貝殻や石・海藻などに、微小でまっ白のうずまいた棲管中にいるウズマキゴカイでしかも汚損動物の代表種(県内各地の沿岸)、夜間、パタパタと音をたてながら海中を活発に泳ぐウミケムシ(県内各地の沿岸)、砂や貝殻片をくっつけた棲管中にカクレガニと共生するチンチロフサゴカイ(県内各地の沿岸)、50~110個の体節でその表面には縦横にかなりのしわと数多くの乳頭状の突起があるクマノアシツキ(県内各地の沿岸)、鰓を広げたときはみごとな美観で明るさに対しては非常に敏感なケヤリムシ(県内各地の沿岸)、ズワイガニの甲らなどに附着生活をするカニビルなどがある。

## 触手動物

分類学上話題をまいた動物群で、昔は植物と動物との中間(虫植類)とさえ言われたことがある。

また、有害な汚損動物としても注目される動物群でもある。11科12種が確認されている。船底や藻類・大謀網の浮きに附着し有害なフサコケムシ(県内各地の沿岸)、こぶ状で鯨昆布の原因となるコブコケムシ(県内各地の沿岸)、卵は赤色でうすく半透明の群体をなすウスコケムシ(三国町沿岸)、アラビヤの置ランプに似ていて両殻にとげをもつ唯一の現生種の1つであるダリナ(敦賀湾沿岸)、などがある。また、隠口類の化石 *Fenestella* sp. が本県の古生代-石炭紀の地層から採集されている。

### 星口動物

英語では Peanut worms といわれ、今から300年以前から名づけられた。しかし、分類学上いろいろと問題があったが、現在では小さな水管の意味で Sipunculoidea(星口動物)となっている。本県沿岸では2科6種が確認されている。例えば、熱帯・亜熱帯のサンゴ礁に穴居生活をするといわれるサメハダホシムシ(越前町沿岸)、浅海の砂泥底や淡水の流れこむ小さな入江など多く生息するクロホシムシ(越前町沿岸～鷹巣沿岸)などがある。

### 腔腸動物

本県沿岸では29科33種が確認されている。主なものを次にあげてみよう。古代ローマ人が羽のはえたペニスと名づけたウミエラ(越前町沖)、昔、魔よけのお守りとして身につけていたというウミカラムツ(県内各地の沖)、海上を風にふかれて帆走するカツオノエボシ(若狭湾沖)、いくつかの伝説があって、触手にはきわめて強力な毒をもつカツオノカンムリ(小浜湾沖)、美しい石ころのような動物と思えないキクメイシ(小浜湾沿岸)、英国では66年間飼育できたというウメボシイソギンチャク(県内各地沿岸)、内湾性で熱帯地方に広く分布し我が国唯一の游泳するオヨギンギンチャク(三国町沿岸)、昼は泥砂中にもぐり、夜、泥砂の上に出てサボテンの花が咲いたようにみえるウミサボテン(越前町沖)、銀貨のようなギンカクラゲ(小浜湾沿岸)、英名ではやわらかいサンゴと呼ぶチヂミトサカ(越前町沖)、一見植物みたいで体にふれると有毒の針が出るクロカヤ(敦賀湾沿岸)、汚損動物・発光動物でもあるが、一見植物みたいなエダフトオベリア(オベリアクラゲ)(三国町沿岸)、もと県水産試験場長が名づけた重量150キロぐらいのエチゼンクラゲ(敦賀湾沖)、暖流性のクラゲで最も普通のミズクラゲ(敦賀湾)、海藻などにぶらさがって一生游泳しないアサガオクラゲ(三国町沿岸)、無色透明で水面下を活発に泳ぎまわるアンドソクラゲ(小浜湾沿岸)、若狭湾が分布の南限といわれるカラフトサンゴモドキ(ストロベリーサンゴ)などがある。

### 海綿動物

確認されているのは6科9種みられる。県内各地でみられる海綿をあげると次のようである。ユズぐらいの大きさで、オレンジという意味の学名で呼ばれるユズダマカイメン、体表には富士山のような突出部があって黒色のクロイソカイメン、体表には火山が連なっているように突出部がある紫色のムラサキカイメン、中空で大きなコップ状をしていて衣服の綿などをとるのに用いたというワタトリカイメン、英名ではパンくず海綿と呼ばれる潮間帯に最も普通のナミイソカイメンなどがある。